

# 「食と農」の博物館 展示案内

No.29

東京農業大学「食と農」の博物館  
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28  
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528

開館時間 午前10時～午後5時(4月～11月)  
休館日 午前10時～午後4時30分(12月～3月)  
月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日  
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

展示期間  
**2008.6.20～8.9**

## 大地に夢を求めて 東京農大生ブラジル移住の半世紀



コーヒーの収穫(写真提供:UCC上島珈琲株式会社)

### はじめに

2008年は日本人ブラジル移住が100周年を迎えます。移住した人はおよそ25万人、現在の日系人口は150万人といわれています。最初の移住者は農業労働者(コロノ)が多く、そのため農業分野を通じてブラジル社会に貢献し、今日では医、弁護士、研究者など知的分野で高い評価を受けています。本学の卒業生も戦後を中心に200名ほどが移住し、農業および関連産業を中心に幅広い分野で活躍しています。

このようにブラジルに夢を求めていった人たちがブラジルの発展に如何に貢献したか、本学の卒業生も含めて紹介します。

### ブラジルと日本人移住

ブラジルの面積は日本の約23倍で、気候は熱帯から温帯まであります。人口は1億8千万人を超え、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系の人々が混交して人種の坩堝の様相を呈しています。



ブラジルの位置と州

日本人の移住は1908年にコーヒー園のコロノ移住として始まりました。途中第二次世界大戦で中断され、戦後再開されたものの、1960年をピークに漸減傾向を示すようになります。当初の移住は船によって約60日の航海でしたが、1960年代後半には航空機に変化しました。

ブラジル上陸後は食文化をはじめとする生活習慣の違いから同化の過程で多くの苦勞がありました。当初の移住は農業移住がほとんどで独立・定着の過程でブラジル農業の発展に寄与し、その貢献度は高く評価されています。



1950年代後半の開拓農家の住宅(写真提供:宮内敏行氏)

### 日本人の農業貢献

日本人移住者が導入した作物は、果樹、野菜、花卉、工芸、雑穀、香辛料から畜産、養魚、養蚕まで多岐に

### ブラジル在留邦人及び日系人数統計

州名	総数	長期滞在者	永住者	日系人推定数
アクレ	25	0	25	日系人推定数は永住者十2世以降の日系人で、(平成十年一月、外務省領事移住部)各種統計等より推定
アマゾナス	1,133	141	992	
アマバ	24	0	24	
アラコアス	17	0	17	
エスピリット・サント	98	10	88	
ゴヤス	312	5	307	
サンパウロ	70,522	2,019	68,503	
サンタ・カタリーナ	419	4	415	
セアラ	83	10	73	
セルジッペ	4	0	4	
トカンチンス	48	0	48	
バイア	593	21	572	
バラ	2,244	77	2,167	
バイバ	33	0	33	
バラナ	4,914	176	4,738	
ピアウイ	12	0	12	
ブラジリア連邦区	781	101	680	
ベルナンブコ	269	31	238	
マツ・グロソ	278	0	278	
マツ・グロソ・ド・スール	2,400	14	2,386	
マラニオン	90	2	88	
ミナス・ジェライス	855	131	724	
リオ・グランデ・ド・スール	1,791	36	1,755	
リオ・グランデ・ド・ノルテ	48	1	47	
リオ・デ・ジャネイロ	1,906	330	1,576	
ロライマ	24	0	24	
ロンドニア	82	0	82	
総計	89,005	3,109	85,896	1,300,000

移住地概要 平成10年3月 国際協力事業団より

わたっています。

果物の代表的なものとして、甘柿は1916年に日本から導入され、今日では日本語と同じカキ(Caqui)と呼ばれて親しまれています。また、生食用ブドウ、リンゴ、ネクタリンなども日本人によって導入されました。中でも、セラードで開発されたルビー・オクヤマは有名です。その他にクリ、ウメ、アボカド、パイナップルなど数多くの作物を導入・育成しています。



ルビー・オクヤマ  
南満氏の農場(サンパウロ州ピラルドスール)

野菜では、白菜、ゴボウ、バレイショ、ナス、ピーマン、トマト、カボチャなどがあります。日系移住者はこれらの新品種の導入・育成・品種改良に貢献し、生産性や品質の向上に努めました。

今日この種の統計はありませんが、1960年代にはサンパウロ州で日系人の生産する農産物の割合は、ジャガイモが100%、キュウリ90%、スイカ、カボチャ、エンドウ80%など高い比率を占めていました。

日系人は、花卉経営の発展にも大きく貢献しました。とくに、カーネーション、バラの商品化、キクのポット・マムの導入はその典型的なものです。



大島正敬氏のバラ農場(路地バラ)  
ミナス・ジェライス州

工芸(繊維)作物ではラミー、ジュート、イグサなどがあります。とくに、輸出用コーヒーを詰める袋に用いられていたジュートは、それまでは輸入されていましたが、日本人が導入し、アマゾン流域の産業にまで成長させました。また、ラミーはパラナ州で栽培、加工が本格的に行なわれています。

穀類では、モチ米、大豆、ソバなどです。とくにモチ米は日本人以外の需要がないため、導入は日本人といわれています。また、現在ブラジルの主要輸出品となった大豆は日本人移住者の持ち込んだ品種が品種改良に利用されています。

香辛料では、コショウ、紅茶、ガラナなどです。トメアス-

のコショウは戦前、シンガポールから臼井牧之助氏によってアマゾンのアカラ植民地に持ち込まれ、日系移住者の手によって育成されました。近年、病気や価格の低迷で生産量は伸び悩んでいますが、ブラジルの主要農産物としての地位は変わりありません。紅茶もサンパウロ近郊の日系移住者が、セイロン(現在のスリランカ)から持ち帰り、レジストロで栽培を始めました。また、ガラナの栽培も日系人がアマゾン中流のマナウス近郊で始めています。

畜産では養鶏業があげられます。養鶏はサンパウロ近郊のバレイショ栽培日系移住者の副業として始まり、コチア産業組合を中心に普及し、生産が拡大しました。第二次世界大戦中はアメリカ鶏が主流となりましたが、戦後は日本種の導入も図られ、日系人の占める割合は高くなりました。養蚕も日系移住者によって導入されました。

### 農大卒業生の活躍

本学卒業生は、現在約200名以上がブラジルに移住し、北はベネズエラとの国境から南はウルグアイとの国境までの各地で活動しています。

北では代表的な作物であるコショウをはじめ、オレンジ、野菜、花卉栽培などを中心に農業を営む卒業生が多く、またトメアスなど各地にある産業組合の理事長、役員などの重要ポストを歴任しています。

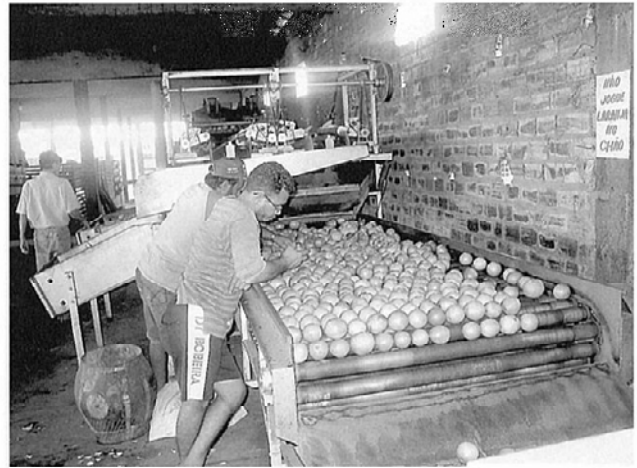
また、近年は地球環境保全のための植林活動、アグロフォレストリへの取り組みも積極的に行なっています。

たとえば、上杉嘉幸氏はベレンの東100kmのイガラッペアスで、コショウ30ha、デンデヤシ(アブラヤシ)を150ha栽培し、コショウを中心とした農場経営をしています。さらに300haでゴム・パパイア・マンゴーおよびデンデヤシの栽培を予定しています。



コショウの栽培 【写真左】生木支柱を用いた栽培(エイタイドブラジル ベレン近郊)、【写真右】鉄木という木を支柱にした日系人の栽培法(上杉嘉幸氏農場 パラ州イガラッペアス)





【写真左】伊藤泰介氏とオレンジ農場、【写真右】オレンジの選果場(パラ州カピトンポソ)

伊藤泰介氏はベレンの東250kmのカピトンポソで、オレンジを中心とした農業経営をしていましたが、果樹園にチークを混植した農場経営に転換を図っています。

南ではサンパウロ州を中心に、園芸農業をはじめ、産業組合や農業資材関連会社の役員や技師など農業関連産業に従事しています。

たとえば、荒木克弥氏はサンパウロから150kmほど離れたアルジャでランを中心とする花卉経営(1.5ha)を営む傍ら、花卉市場の開設、アマゾン地域での花卉栽培なども手がけています。



荒木克弥氏のラン栽培

大島正敬氏はサンパウロ州の北にあるミナスジェライス州でバラを中心とした花卉経営を営み、サンパウロの花市場に出荷する他、サンパウロ市内の小売店にも直接出荷しています。南のサンタカタリーナ州ではニンニク、日本ナシの栽培を行なっている卒業生もいます。この他、ブドウ・リンゴ栽培、養鶏など幅広い分野で活動しています。

農業発展に貢献した人に贈られる山本喜誉司賞も3名(花卉、新農法の確立、緑の保全)います。

この他、農業関係ではありませんが、商業活動で自営をする卒業生も数多く、さらに出身都道府県別

に組織された各県人会の会長、様々な文化協会の役員などを務める卒業生もいます。

卒業生の社会的活動や相互連絡、また親睦を図る組織としてブラジル東京農大会が組織され、本部となる会館がサンパウロ



校友会館

市内に設置されています。ブラジル校友会の前身は、昭和初期に移住した卒業生が相互に連絡を取り合っており、交遊を結ぶことから始まりました。

最初の移住者はパラナ州で麦の改良に従事した佐藤貫一氏(大正13年専門部卒)です。それに続いて農業技術者、管理職として10名余りが戦前に移住しました。戦後、多くは独立自営を目指し、実習生として個人農場で学ぶケースが多くなりました。

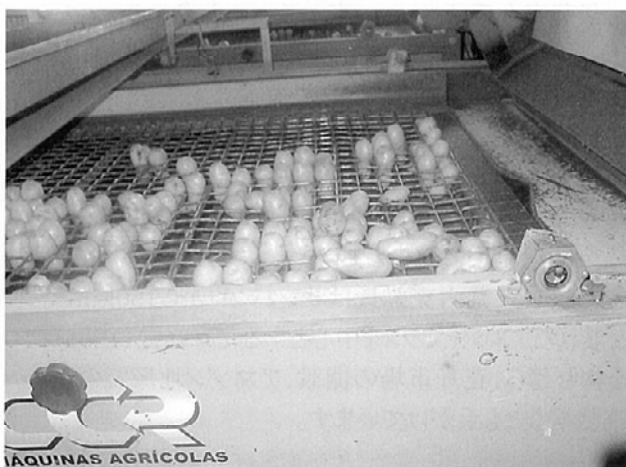
現在、会の主な活動は7月末に行なわれる慰霊祭、会報の発行、実習生の受入れ、子弟教育の補助としての寄宿舎運営など、大学との密接な連繋に基づいた活動を行なっています。

## 課題と展望

ブラジル政府は1970年代後半からそれまで誰も手を付けていなかったセラード地域の農業開発に日系農協を中心に着手しました。セラードはブラジル中央部に広がる面積約2億haの乾燥台地で、灌木疎林の生える植生です。しかし、現在では日本の協力によって、大豆、コーヒー、トウモロコシなどの大産地となり、セントラル・ピボットを用いた灌漑方法で生産性の向上に努めています。



坂口氏のアグロフォレストリー 【写真左】坂口氏とランブータン 【写真右】アセロラ、ランブータン、アサイヤシなどの混植



ジャガイモ畑と選別機(セラード、サンゴタルト)

また、熱帯地域の農業開発で注目されているアグロフォレストリーは、坂口陸氏がコショウの栽培に限界を感じて、新たな農業の方向性を探っていたときに、アマゾンの現地住民の屋敷地農業を見て考え出しました。それはアマゾンの生態系にマッチすることが持続的な農業であると考え、有用植物を組み合わせた森林農業を始めました。いわゆる、高位、中位、低位、地這性の作物を組み合わせたもので、今ではアマゾンのみならず、世界各地に広がりつつあります。

しかし、日系農業は全てが明るい見通しだけではありません。近年、日本への出稼ぎ者は移住者数とほぼ同じ、また高学歴化に伴う後継者不足など、多くの問題点もあります。それらの問題点も含めて、移住100周年を機に再度ブラジルに対する日系人および日系農業のあり方を考えることは重要ですが、つぎの100年に向けた学術、技術交流を含む新たな人的交流を企画し、勧めることがより必要と考えます。



ニンジン畑の消毒(セラード、サンゴタルト)

文)小野 功、三籙久夫

# 大地に夢を求めて～東京農大生ブラジル移住の半世紀～

## 関連行事

### ■講演会（無料・参加自由 直接会場にお越し下さい）

#### 1. 「私のスキなブラジル」

講師 岡 誠治氏（株式会社アルファインテル南米交流 取締役 第2営業部長）

2008年7月12日（土）13：30～15：00

※講演が終了後ブラジルの料理「フェジョアード」の試食会を開催いたします。

#### 2. 「東京農大生のブラジル移住の半世紀」

講師 小野 功氏（東京農業大学名誉教授）

2008年7月26日（土）13：30～15：00

※講演が終了後ブラジルの地酒「カイピリーニャ」の試飲会を開催いたします。

■企画 国際食料情報学部国際農業開発学科地域農業開発研究室

■展示委員 三簾 久夫 堀内 久太郎 小野 功 夏秋 啓子 梅室 英夫 原口 光雄

## 同時開催

### ■センサーカメラでみる野生動物の世界

～身近にいるのに気づかない野生動物たち～

2008年3月28日（金）～8月31日（日）

### ■水利用から見たアフリカの乾燥地開発

～モロッコのハッターラを用いた水利用～

2008年5月17日（土）～11月9日（日）

### ■稲に聞く

通年企画展示

## これからの展示・催事

### ①ワイルドシルクフェスタⅡ

2008年9月17日（水）～9月28日（日）

### ②第2回 東京都食育フェア

2008年10月12日（日）・13日（月）

### ③五感で楽しむトロピカルフルーツ 予定（日時未定）

### ④レムール ～マダガスカルの不思議なサルたち～

2008年11月20日（木）～2009年3月22日（日）

### ⑤地球になった庭 ～“みどり”の環境づくり千差万別～

2008年11月20日（木）～2009年5月6日（水）